

文芸研ニュース

2021年12月25日
—NO. 159—

発行 文芸教育研究協議会
編集 文芸研事務局



皆で作りに上げたオンライン全国大会

事務局員の妄想日記	事務局長より	1
足立先生の著書紹介	新役員より	5
青年学校便り	旧役員より	9
初レポーターを終えて		10
足立先生の著書紹介		12
事務局通信		14
事務局員の妄想日記		15
		16

第55回オンライン文芸教育

全国研究大会をふり返って

委員長 辻恵子

●成功までの道筋

二〇二〇年八月一、二日に予定されていた第55回文芸教育全国研究大会（山口大会）でありましたがコロナ禍の中で開催を断念せざるを得ず、今年八月一日、（一日）オンライン開催となりました。コロナウィルスの猛威が高まり深刻化する一方、東京オリンピックが無観客開催されるという異常な状況の中で、文芸研初のオンライン大会は全体会・第一、二、三部の参加者数のべ826名（参加申し込み226名、参加者数809名）という盛況を呈し、無事成功裡に終わりました。

ここにいたるまで、多くの大学でオンライン授業が当たり前のようになり、ちまたで様々なオンライン講座も開かれるようになってきたこともありすが、それよりも何よりも「運動を止めない」という思いから、今年こそ何とかして開催すべくオンラインでの実施を検討してきました。プロジェクト

ムを立ち上げて三回にわたって議論、さらに全国委員会で話し合いを経て、三月二〇日の臨時代表者会議で完全オンライン大会を決定しました。ハイブリット（せめて現地山口では参加者を会場に集めて）やれないかとか、大会当日はレポーターと司会者は原則精華小学校に集まるべきかとか、オンラインでは半日開催がいいのではないかとか、さまざまな意見が出され、またオンラインでは著作権侵害にあたらぬよう今まで以上に厳しく対処する必要性も指摘されました。その中で①例年通りの大会はできない。②運営をシンプルにする。③大会の運営を成功させる。という、三つの原則を共有して、大会事務局（実際には事務局が兼任することになりましたが）を立ち上げて、山中尊生さん中心に進めてきました。くり返し討議を重ね、その決定に従って献身的に活動してきた事務局の皆さんの奮闘なくしては、大会の開催は不可能だったでしょう。

また、大会に先だって、各地で昨年度からオンライン学習会がもたれてきたことも、大会成功の大きな鍵になりました。「枚方サークルの学習会に参加したら、ブレイクアウトルームで話し合ったのが有効だった」「東京の学習会では資料の提示がよかった」「話し出すタイミングが難しく、つい受け身になってしまった」など、やってみてわかることが

多々ありました。

そのような各地の学習会を経てもなお、分科会を円滑に進行できるかどうか、とりわけ当日突発的なトラブルが起きたら対応できるかどうか、そんな不安の声が多くありました。が、精華小に集った（また現地から）若い先生達がホストとして各分科会に張り付いて支援してくれました。専門家抜き、身内だけで運営をやり遂げた事務局の皆さんに、感謝の思いでいっぱいです。（入門講座、分科会における運営面での課題もありますが、ここでは省きます。）また当日、本部会場を提供し、オンライン大会を全面的にサポートしてくださった精華小学校職員・サークル員の皆様の献身あってこそこの大会成功であったことも、忘れられません。改めて感謝申し上げます。

尚、山口文芸研の皆様にはオンライン開催が決定するまで長きにわたって準備を進めていただきました。それにもかかわらず、現地開催の中止やむなしと判断したことを、申し訳なく思っております。改めてご尽力に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

● 内容面では

さて、今回会の運営面とは別に、内容面はどうだ

ったでしようか。「ものの見方・考え方を育てる国語の授業―美と真実を求めて―」という大会テーマにせまるものになったでしようか。

まず全体会。山中吾郎さんの講演「ベーシック文芸研―今こそ育てたい国語の力とは―」では、コロナ禍、そしてソサエティ5・0時代、GIGAスクール時代を生きる子ども達の学びの個別化、孤立化を鋭く指摘するところから始まりました。それに抗するのは「ことばの力」であるという山中さんの提言は重要です。さらに文芸理論を視点論にしぼって、また教育的認識論を条件、順序にしぼってそれぞれ具体的に解説。わかりやすく、充実した提案であったと参加者から非常に高い評価を得ました。

次の第一、二、三部、入門講座・分科会では、まる一日かけてじっくりと報告する予定のレポートをもとにしていたため、それをどう提案するかが最大の課題になりました。〈練り上げてきた教材分析と授業実践を通して、大会テーマを参加者に理解、納得してもらおう〉、このねらいを百分間で達成するのは至難の業、「時間が足りなかった」という思いは提案側、参加側双方にあったと思います。それでも、アンケートでは参加者の84%以上がよかった(4段階評価の3, 4)であったこと(有効アンケート数七十九件)は、大きな成果です。今回はポイント

ポイントを参加者にわかってもらうことで、よかったのではないかと個人的には思います。

各分科会の成果と課題については、それぞれの司会者から提出されたものを整理し、まとめてあります。来年度の提案者・司会者はぜひ目を通して、役立ててください。よろしく願います。

●ぶれずに進んでいきましょう

ある大会アンケートに、次のような意見が書かれていました。

「授業記録を読ませていただくと、教師が誘導的に授業を進めていく印象があります。数十年前から、授業のスタイルが変わっていないと思います。発言中心のようですが、発言できない児童はどうしているのか、音読はさせないのか、書く活動をどのように位置づけるのか、課題を感じました。文芸研の西郷理論の素晴らしさは、十分感じています。しかし、実践として一般化するには、改善の余地はあるのではないでしようか。西郷先生は、生前、常に『授業に絶対はない』とおっしゃってました。新学習指導要領が、文芸研の目指す理念によりやく追いついてきた今だからこそ、変革を望みます。」

これまでもずっと文芸研の授業に対して『一問一答』、『教師主導』、『発問中心』等の批判はあり

ました。活動中心、子ども任せの授業形態と比べると、確かに教師が指導性を発揮しているからです。今後、「ICTを活用した個別最適な学び」が叫ばれるようになる、さらに文芸研の授業に対してこのような批判が出ることは十分予想されます。（でも、ICTを活用したスタンダードな授業はICTまかせ、ICT主導では？）「古い」「化石」と言われるかも知れません。

しかし、授業の方法を問う前に、内容はどのようにか。まずは、教材の表現内容、認識内容、典型化について、周りの教師や文芸研の理論や実践に懐疑的な相手とも少し話し合ってみましょう。教材の意味、価値を深く学び、学ばせるおもしろさが伝わったら、しめたもの。さてその次に、授業の方法です。

学ばせたい内容に至るには、子ども任せ、業者のワークシート任せ、ICT任せの授業手法では到底無理だとわかるはずです。文芸研がめざすのは、教師の発問が方向性を示しつつも（必要な時は方向転換を示唆しつつも）、児童同士の表現をふまえた発言が響き合って、より深く、より本質に迫る（ねらいに到達する）授業です。ねらいによって、どこでどう音読することが効果的か、何をどう書くことが必要か、その位置づけはさまざまです。教師も含め

学級みんなで、活動中心、子ども任せの授業では到達し得ない深い意味づけに至る、そんな授業実践が（それをめざす授業実践が）、わたし達の提案です。ぶれずに、この道を進んでいきましょう。

●第56回全国大会について

二〇二二年、第56回文芸教育全国研究大会については、リアルでの（対面での）開催をめざしてこまですつと松田さんはじめ徳島文芸研の皆さんに準備をしていただいてきました。コロナ禍二年目、長期にわたり様々な活動が制限されてきたからこそよい、青い空と海の下、共に学び、全国の仲間と交流できることを願ってきたのです。しかし、一月一三日のサークル代表者会議において、コロナ禍終息とはいかない厳しい状況を鑑み、オンライン開催という決定をせざるをえませんでした。残念であります。なにより徳島文芸研の皆さん、本当にすみませんでした。見通しが不透明な中、準備を進めていただいたことに心より御礼とお詫びを申し上げます。

激動の二〇二一年が終わり、新しい一年が始まります。それぞれのサークルで学習会をどうもつか、サークルの拡大をどうしていくか、ぜひ話し合ってください。

最後に今大会前日の全国代表者会議で新体制人事案が採択されました。以下の通りです。皆で力を合わせて進んでいきますので、どうぞよろしく願います。

委員長

辻恵子（とりまとめ・民教連担当）

副委員長

佐々木智治（組織部・組織体制担当）

曾根成子（研究部・全国大会担当）

石野訓利（広報部・HP担当）

山中吾郎（出版編集部担当）

全国委員

斎藤鉄也（北海道）秋元須美子（青森）

小松小百合（東京）秋山亮介（千葉）

辻村禎夫（京都）福崎健嗣（大阪）

村尾聡（兵庫）吉田剛人（広島）

清田和幸（山口）松田真理（徳島）

永渕和彦（佐賀）

全国事務局

山中尊生（事務局長 大阪）

松山幸路（大阪）倉富寿史（神奈川）

酒井大輔（山口）赤穂徳郁（兵庫）

西真由子（東京）市川陽子（豊中）

会計監査

林三十四

新役員より

バトンをつなぐ副委員長として

千葉文芸研 松戸サークル 曾根成子

●青天の霹靂！私にとってそして、もしかすると文芸研にとって

2021年、コロナ禍の中での初のオンライン大会に向かう春の実践研を迎えた中での上西さんの委員長退任宣言！残念ですが、上西さんのお考えもわかるように思えました。その後、サークル員、現地となった精華小の皆様のご尽力そして何よりも全国からの参加者を得てのオンライン大会が成功裡に終わりほっと安堵したその後、まさか、自分が役員になることになろうとは。：まさに青天の霹靂。（一度だけ言わせてください。）

●バトンをつなぐ

新役員としての活動が始まって数か月。全国委員会、サークル代表者会議そしてこれからの実践研等のための準備に関わってきました。そのたびに感じるのは、いかに今まで呑気に導かれたレールに乗ってきたのかという猛烈な反省です。

私にこの運動と研究を中心となって進めていく能力は……。もちろん自信などありません。ただ、あるとすれば、文芸研と出会ってからの私の教師人生がどれほど豊かで充実したものになって今に至っているという実感と感謝の気持ちです。

私が、文芸研の実践そしてサークル活動に参加したのは、加藤憲一先生のいらっしゃる学校に転勤した時、三十代も半ばでした。加藤先生に声をかけていただいたの例会参加。本当に毎回楽しく、充実し、今考えると恐ろしくなるほど遅くまで話し込んでいました。当時の松戸サークルでは、加藤洋子先生、上西さん、辻さんそして西郷由美子さん、大畑さん、畠中さんとそれぞれの方のお話を伺えるだけで「もう幸せ！」と叫びたくなるような時間でした。そして、子育て真っ最中だった長屋さんと二人で青年学校八期に参加し本格的に文芸研で学びをスタート、今日に至っています。学習は勿論ですが、プレ&アフタースクール（これは、交流会や往復の新幹線の中、大会や実践研後の飲み会等々）も含めてその時間だけは、その他の現実生活を切り離して熱中したものでした。西郷先生の理論と実践には学び尽くせない深さと豊かさに魅了され続けています。と同時に西郷先生が巻き起こした運動体であるサークル活動に参加して、全国の皆様との出会う中で、かけが

えのない勇氣と希望をいただくことになりました。

地元の松戸サークルでもそれぞれの関わり方で運動を続ける多くの仲間と出会ってきました。現在は、秋山さん、沼澤さんとこれからを引継ぎ発展させていく方達がたくましく力をつけてきています。この間続けてきた国語の教室（ここ二年はオンライン開催）では、常時参加の方、不定期参加の方も含めると多い時には、二十名近くの方が参加しています。ここでは、サークル活動に共感し支援してくださった仲間が学習の核となって参加者を増やす大きな力となっています。

さて、いただいたお題は、副委員長としての私の抱負です。文芸研の歩みの中で一走者として参加してきた私がこれからの皆様へバトンをつなぐことこそ、今やるべきことと考えています。これからを創っていく皆様のお力に少しでもなりたいと願い、運動・研究そして実践を共に学びつつ進めていきたいと考えています。以下に引用しました上西さんの退任の辞に込められた意味と価値を私自身に問いながら任された役割を果たしていきます。

皆様、よろしくお願いいたします。

文芸研ニュース一五八号より引用）

〇〇多くの民間教育研究団体が「老人」ばかりにな

つていったことと好対照でした。そこには青年学校の創設・継続や意図的に若手・中堅の登用と、西郷先生の中長期の戦略があつたことは確かです。

○西郷先生が何よりも大事にしていたことは、初期の《関係認識・変革の教育》論から導かれる学習と運動の統一ということでした。子どもだけが自己を変革主体に育てる対象ではなく、教師も運動の中で鍛えられ変革主体として子どもと共に育つのです。

○西郷先生は役や任務を割り振るとき「十分力があるから役に就くのではない。役が当人をふさわしい器に育てるのだ」とことあるごとに私たちに諭しました。

「十分力があるから役に就くのではない。役が当人をふさわしい器に育てるのだ」

●これからのこと

「民主主義は、時間がかかる」

これからの文芸研の運動の中で合意形成こそ基本かと思っています。様々な変化の中で今までの踏襲だけでは進まないことがこの間明らかになり、決めなければならぬこともたくさん見えてきました。すぐには決まっていけない現実にはやきもきしたり、

時間がないからと安易に決めたりということは避けなければと思います。

辻委員長のもと、新たに船出した全国の皆様と知恵を出し合い、一致点を見出しながら、一步一步前へ進めていきましょう。

「組織の弱体化は規約無視のズブズブの恣意的な運用から始まります」(上西さんの言葉)

肝に銘じます。今後の規約改正も含めて自分たちで決めたことは、自分たちで守り育てていきましょう。(学級会のようなです。)

「身近な先輩たちに学ぶ」

コロナ禍での対面でのサークル活動、実践報告等が困難な中で、オンラインの学習が中心となつている現状があるのではと思います。松戸サークルは、ほぼ二年間は、リアルでは開催していませんが、今の状況の中でも学びの歩みを止めないという熱意とそれに伴う私たちの学習は大いに評価してよいものと思います。また、今後の展開の可能性も追求したいと思います。と同時にオンラインとは対極にある対面での学習、それに伴うプレ・アフタースクールでの学習はいかがでしょうか。お互いの表情や声を受け止めながら、共感し、また、意見交流する

時間が奪われている二年間でもありました。その中で失われるものの大きさを考えずにはいられません。

各地には、今まで、そして今も文芸研の運動・実践・学習を牽引されてきた諸先輩方がいらっしゃいます。今だからこそ、意図的・意識的に先輩方に学ぶ、お話を伺う機会を持ちませんか。私は、お近くにいらっしゃる加藤先生ご夫妻に会いにいくたびに、それとなく話されるお話の内容は勿論ですが、お二人の人間や世界を見つめる眼の確かさ、深さに毎回学ぶことになるのです。

ぜひ、それぞれの地域・サークルの先輩に学ぶ機会をということを訴えます。
以上



旧役員より

文芸研副委員長を辞するにあたって

参事 野澤正美

青年学校五期生を終了した三十年前、私は、すぐに西郷竹彦先生から「野澤君、君文芸研の実行委員長になってくれ。」と指名され、お世話になっていた関係上断ることもできずに、ずるずると三十年間本部役員を引き受けてきた。

しかも、二〇一七年六月十二日その西郷竹彦先生がお亡くなりになった。

そのひと月前、私は、同じサークルの家内と福山サークルの数名で岡山までお見舞いに行った。西郷先生は、目をつむり力なく横たわっていたが、「聞いているから何でも話さない。」と言うので、私は、少し前に参観した大阪教育大付属小のスピノフという活動主義国語の問題の授業の実際について話をした。西郷先生は、苦虫をかみつぶしたような表情をされていたが、帰りしな私の手を握り、「文芸研を盛り立ててくれ。」と言われた。私は、それからというもの、この言葉を西郷先生が私に残してくれた遺言だと思っているし、その後どうしたら会を盛り立てることができるといろいろと苦心してきたが、今夏をもって副委員長の座を自ら辞し、後進に座を引き継いでもらう決心をした。しかし、全く離れてしまうことは、西郷先生の遺言に背くこと

になるので会の末席（参事）として辻新委員長を支えて盛り立てていきたいと思う。今後ともよろしくお願いいたします。



初レポーターを終えて

共同体験のドラマ

【当日の様子】

同化体験と異化体験をないまぜにした…の「ないまぜ」ってなんですか。
視角の転換の意味がよくわかりません。

【1週間前】

もう少し「虚構の方法」について詳しく説明した方がいいと思うよ。

【サークルの検討検討会】

ここは、「つながりあいたいごん」をおさえたほうがいいよ。

【冬の実践研でのこと】

ごんってしゃべるのですか。
ごんと兵十のつながりあえない関係をしっかりとおさえるんだよ。

【ある喫茶店での話】

もつと「真実」について書いた方がいいよ。
子どもたちにつけた力について表にまとめてみては。

「書かかれている」でなく、「話者に語られているんだよ」

たくさんの中間の問いや助言によって成長させていただいた2年間。問われる内容の質が高く、まさに答えのない状態が続く日々でした。それでも、なんとか食らいつき、調べ、実践に移すことで少しずつ文芸研のいろいろなことが自分の血肉になっていくことが実感できました。

成長とは何か。それは、仲間を得ること、そして求めること。この発表までの2年間で得た体験と成長は、本当に人生を変えるものとなりました。

発表が終わった時は、達成感と自分の未熟さへの気付きが一気に押し寄せてきました。そして、「授業」がしたい！と素直に思いました。子どもたちのことを発表できた喜び。質問に答えられない自分の時間がなく予定していた発表をとりやめる。オンラインでなくとも、きっと同じことが起きて、同じように感じたことでしょう。そして、ここまで引き上げてくださったという、感謝の気持ちに胸がいっぱいになりました。

「民間教育団体の冬の時代」―「働き方改革への逆

行」(大事なことでまで削ってないか。」「校内で仲間集めはしないほうがいい」(いいものを広めて、なぜいけない。仲間を求めるのが人間としての姿。)

「いじめ・保護者対応、やるが多くて教師は大変!!」(育てる喜び、成長する喜びはどこへいった。)

「教師は学び続けることが大事」とよく言いますが、では、教師の学び方ってどう習得するの?教師自身の学ぶ時間の保障は?教師自身の学びの最適化は?ということです。

求めるばかりでなく、自分から主体的になることの大切さ、今ここあることを鋭く見抜く力。2年前の自分と比べて、よく学び、成長の実感を感じることでできました。なぜって:それは、文芸研に出会えたからに決まっていますよね。

おそらく、西郷先生と生で出会うことなく、全国発表した初めの人だと誇らしく思っています。(本当は、残念でしかたがないのですが:)誇らしく思える理由は、西郷先生の教えが、これでもかこれでもかというほど、出会う先輩方から伝わってくるのです。「むかし、むかし、西郷竹彦という者がおったそうじゃ:」と100年後も語り、そして実践しつがれること間違いありません。

たくさんの先輩の先生方が、この全国レポーターという大変なことを繰り返しやっていることに初めは驚きを感じました。しかし、発表してみても、繰り返しやりたくなる気持ちもなんとなくですが、分かるような気がしました。まだまだ未熟な私ですが、オンラインの特性を生かし、色々なところで勉強させていただきたく思います。本当に仲間に入れていただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。今度は、自分も迎え入れる側となるので、先輩たちのように「あたたかく」受け入れられるようにしていきたいと思いました。

最後になりますか、コロナ禍で大会を支えてくださった全ての皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

青年学校便り

いまだからこそ見えたこと

唐津サークル 川口芹奈

青年学校は、2年を一期としての学習が基本でした。1年目は、対面での学習で、開催地ならではの学習をすることができていました。2日間たつぷりと対面で参加して、講師の先生とメンバーみんなで意見を交流することのできる学ぶことの楽しさは、今でもオンラインには代えがたいものだと感じています。

コロナの感染拡大にともない、なかなか全国各地から集まることが難しくなりました。最初は、どうしたらいいかわからず、青年学校の学習会も一時期は休止している時期がありました。

ZOOMでの会議の方法が普及し、ZOOMでの学習会にチャレンジすることになりました。初めのオンラインでの学習会は、山中吾郎先生にホストもお願いする形で、やり方を教えていただきながらのスタートでした。久々に、メンバーの顔を見ることができ嬉しかったことを覚えています。何より、学ぶことができる有難さも感じました。新しいことを始めるときは、勇気がいりました。はじめても続けられるかという不安もありました。初めは、午前中3時間で学習会を開催していました。学ぶことはとても嬉しい

かったの唐すが、オンラインでの学習は、なれないこともあり、長時間の学習に厳しさを感じていました。

そこで、課題となったことが2つありました。1つ目は、オンラインの学習で学ぶことのできる時間の短さです。もともと、2日間午前も午後もどっぷりと学びにつかることができていました。ですが、それがなかなか出来ない状況が続いていました。そして、2つ目は、青年学校としての目的がぶれてしまっていたことです。オンライン開催の利点として、現地に集まらなくても参加することができます。文芸研の初めの一步として、青年学校に参加していただき、文芸研の学ぶ楽しさを広めたいというメンバーの願いがありました。そこで、自分たちの理論を学ぶための学習会なのか、来てくださる方に分かりやすく伝えるための学習会なのか、自分たちの中でも目的がぶれてしまっていました。

上西先生をはじめ、先輩の先生方にアドバイスをいただきながら、定例会と季節開催の学習方法にたどり着きました。定例会では、毎月、第2土曜を青年学校の定例会の日に決めて、どなたでも参加していただけるような、そして、自分たちの学習になるような学習会を目指しています。上西先生にご参加いただき総括をしていただいています。自分たちで

課題を見つけて学習し合うことはとても楽しいです。ですが、続けることは、やはり大変で「今月はどうしよう：」と思う月もありました。しかし、メンバーと話し合いながら試行錯誤を繰り返して、6か月続けることができました。自分たちで続けられたことにも喜びを感じています。

季節開催の学習会は、自分たちが文芸研の理論をじっくり学ぶことを目的とした学習会です。講師の先生方をお願いして、1日開催にしていたいただきます。この2つの学習会に分けたことで、自分たちの2つの目的と学習時間の短さを克服することができました。そして、毎月青年学校のメンバーと顔を合わせることで、仲も深められたかなと思っています。

コロナの感染拡大で、当たり前前にできていた顔を合わせる事が難しくなり、そんな中でも、試行錯誤を繰り返して、学習をつなげることができています。オンラインの学習会は、手軽さや簡単に参加できるというメリットがあります。しかし、顔を合わせて対面での学習には、その場でしか味わうことのできない雰囲気や意見交流などもたくさんあると思います。コロナだからこそ見えてきた、顔を合わせることでできる良さにも気づくことができました。コロナを乗り越えることができれば、オンラインで

のメリットも生かしつつ、対面での学習をしていきたいと思います。そして、全国大会で、全国の文芸研の先生方にお会いできる日を楽しみにしています。



足立先生の著書紹介

足立悦男著『大空放哉(たいくうほうやい)』

西郷文芸学研究の第一人者であり、『西郷竹彦文芸・教育全集』（恒文社）編者の足立悦男氏（島根大学名誉教授）の『大空放哉』（今井出版・1000円）が上梓されました。氏のライフワークである自由律俳人・尾崎放哉をテーマにした『みなんごあんの春』（新日本海新聞社 2018）に続き2冊目の著書となります。

『大空放哉』では視点人物に女性編集者「夕子」を設定し、放哉を支えた人々―姉「並」・庵主守「シゲ」・妻「馨」……師「井泉水」との対話や書簡・作品を縦横に駆使して虚構の時空を創造し、立体的に実感的に放哉像を刻み上げていきます。俳句誌『層雲』や『放哉全集・二巻 書簡集』（筑摩書房）、放哉所縁の地の訪問など現実をふまえ、現実をこえる虚構度の高い作品となっています。

また、本書は『啄木名歌の美学』（黎明書房 2012）で西郷先生が、「啄木の三行書き短歌は、歌でもあり詩でもある」と喝破したのを彷彿させる、自由律俳句を組上にのせながら氏の詩論の展開とも読めます。サークル会員の皆様にお奨めします。なお、今井出版は米子市の出版社でネットによりますと以下のとおりです。アマゾンからも購入できます。

住所：〒638-0103 鳥取県米子市富益町8 TEL：0859

- 28 - 5551 fax：0859 - 48 - 2058 e-mail：

imaibp@imaibp.co.jp

（信天翁記）



事務局通信

寒さも増し、冬の到来を告げています。今の所コロナも少し落ち着き、少しずつ色んな方とのつなが

りも戻ってきている事だと思えます。前回の臨時代表者会議のご出席ありがとうございます。今後の文芸研のあり方についても少し議論ができ、あらたな歩みの一步を踏み出せたと感じています。

色んな状況が変わってきていますがそれを踏まえて、大切なものをしっかりと認識し全国のサークルの皆様と文芸研の運動を支えていきたいです。

辻委員長をはじめとする新しい全国委員体制になっています。皆様にもたくさんのご協力をお願いする事もあると思います。どうぞよろしくお願いします。

前年度、「実践研に行ったつもりで文芸教育誌」という活動のアイデアもありましたが、今の教育現場にこそ必要な教育的認識論と実践が詰まった文芸教育誌です。サークル会員が一人一冊知り合いの方に進めるだけでも大きな運動になります。是非、サークルで話し合い若い先生方、隣の先生方に手渡せるようご協力よろしく願います。

★文芸教育、授業シリーズについての呼びかけ・販売をお願いします。学習会が組織しにくい中ですが、サークルでの学習や学校の同僚への紹介など、工夫して広げていきましょう。

全国大会がない中では、書籍、学習会が運動の柱になります。ぜひ、サークルでのご検討をお願いします。

★サークル会費納入お願い。まだお済みでないサークルは振り込みでの納入をお願いします。ご協力よろしく願います。

今後の予定

5月 春の実践研予定

※今後の予定が詳しく決まりましたら、随時お知らせいたします。

【事務局員の妄想日記①】

ある事務局員の妄想による、

ある事務局長の夏

ふう。

終わった。全国大会が終わった。文芸研事務局長。全国大会事務局長。大きな二つをこの両肩に背負った状態で、よく一つの体で完走したなど。終わった今、肩の軽さが下ろした荷物の重さを教えてくれた。特に七月は、フル馬拉ソンの最後、ふらふらで競技場に戻ってきて、そこからまだまだゴールが見えないレースのようだった。足が棒になっていいるのにも関わらず、まだ何十周もトラックをぐるぐると回らないとゴールできないような感覚。そのゴールテープを切ることができた。

大会当日は、細かなミスやトラブルはあったものの、文芸研初のリモートによる全国大会は、成功を収めることができた。たった今、俺は、務めを果たし切った。新大阪から横浜に乗り込む時、本当にうまくいくかとドキドキしていて、大きな敵に向かって新幹線に乗り込んだのだ。その敵を見事に倒すことができた。総括会議を終えた時、そんな爽快感を覚えていた。

ただ、ここ最近ずっと家族、とりわけ妻にも迷惑をかけてきた。文芸研が恋人であるかのように、毎日を過ごしてきた。最後に妻と会話したのは、いつの頃だったろうか。新横浜行きの新幹線が、第一の恐ろしい敵の元へと向かう新幹線。もしそうだとし

たら、今から乗ろうとしている新大阪行きの新幹線は、第二の恐ろしい敵の元へと向かう新幹線。そのチケットを右手に握っていた。右の手の平には、汗が滲んでいた。

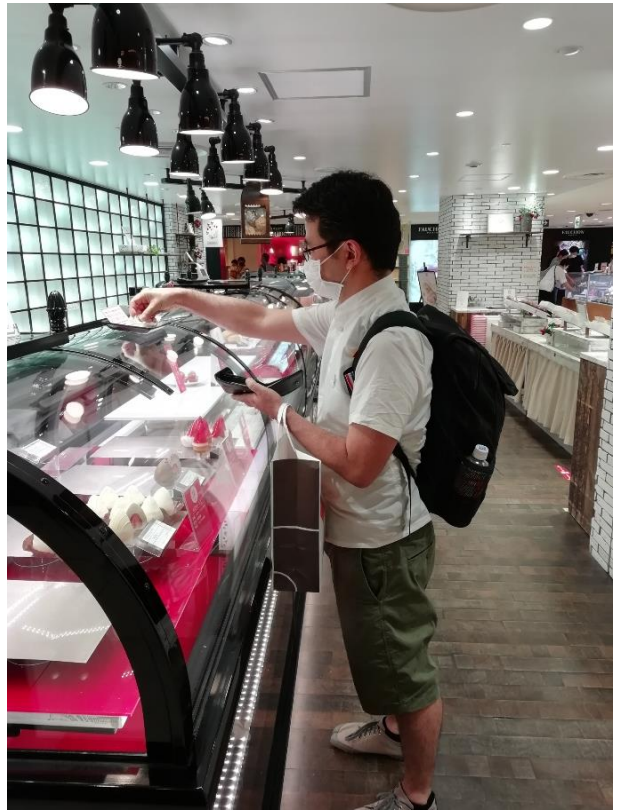
「のぶおさんの家族へのお土産代は、事務局の経費から出してもいいんじゃない？(笑)」

さあ、事務局長 兼 大会事務局長 兼 一家の大黒柱(建前上)は、新横浜駅でどう行動するのか……。「事務局の経費から出しても……」という吾郎先生の冗談は、文芸研会員ならば、ほとんど冗談には聞けない。本当にそうしてもいいのではないか。あなたは、文芸研にとってこの夏のMVPなのだ。あの冗談を、本気にしてもいいのではないか。

彼は、妻の好みに合ったお土産を選んだ。ポケットから財布を出した。公私ともに重いものを背負ってきたその腕で、ポケットマネーから代金を支払い、デパート地下一階を立ち去った。レシートは受け取らなかった。

新大阪駅に向けてシウマイ弁当に舌鼓を打ちながら、この夏を振り返りつつ、もう一人の事務局長と次の展望を語り合っていた。

(完)



【事務局員の妄想日記②】ある日の学級通信より

あの時に戻れたら

皆さんにも、あの時に戻れたら、ということはありませんか。

その日は、朝から少し雨降り。傘を差すほどでもありませんでしたが、一応傘を持って行こうとしました。でも、いつもの黒くて大きい傘が見当たりま

せん。どこにやったんだろう？京阪樟葉駅に向かう電車の中で考えていました。

思い出しました。昨夜、帰宅途中、近所のコンビニに寄って買い物した時。外の傘立てに置いたまま店を出て、そのまま帰宅してしまったのでした。

その日の仕事終わり、そのコンビニに向かいました。この手に取り戻すために…(なぜかカッコよく言ってみる)。

ウィン…。店員さんを見ると、昨日の人とは違います。でも、傘は店の奥にしまわれているはずです。

「すみません…。」

かくかくしかじかであると、説明。

「お待ちください。」

その大学生風のお姉さんは、マスクごしではありますが、女神のようにほほえみ、奥へ消えて行きました。そう。店のバックヤード、そこにいるはずだ。お迎えを今か今かと、首を長くして待っているはず。24時間も窮屈な思いをさせて、申し訳なかった。さあ、我が家に帰ろう。

女神は、一本の傘を手に、現れました。

「あなたが落としたのは、この金の傘ですか？」と言うかのように、問いかけてきました。私は答えました。

「いいえ、違います。」

それを聞くと、女神はまた奥へと消えてゆきました。再び女神が現れるのに、それほど時間はかかりませんでした。再び私に尋ねました。

「では、あなたが落としたのは、この銀の傘ですか？」と言うかのように、尋ねてきました。私は、再び答えました。

「いいえ、それも違います。」

女神は、残念そうに、もう一段階上の笑顔を見せました。

「すみません。今の物しか見当たらずに…。」

「そうでしたか。分かりました。何度もありがとうございます！」

女神に頭を下げて、店を後にしました。

もしかしたら、いつも使っていた傘は誰かの傘になっちゃったのかもしれない。それは確かに悔しいけれど、自分が置き忘れたのが悪いわけで。愛用していた傘には、とても申し訳ないなあという気持ちです。

自分に作文帳があったなら、書いて読んでもらい、この悔しい話を先生に分かってもらいたいです。

(完)